

旦那様のお気に召すまま
～花嫁修業は刺激がいっぱい～

目次

旦那様のお気に召すまま ～花嫁修業は刺激がいっぱい～	5
番外編 旦那様がお気に召すまま ～新婚生活は刺激がいっぱい～	257

旦那様のお気に召すまま
～花嫁修業は刺激がいっぱい～

プロローグ

「じゃ、後はお二人でゆっくりお話ししてみてくださいな」

お見合いを仲介してくれた叔母は、笑顔でそう言っただけで部屋を出て行った。その途端、私は緊張と不安がピークに達して、顔から血の気が引いていく。

——お、叔母さん……、私、この後どうしたらいいの……!?

料亭の一室に残されたのは私こと英玲香と、そのお見合い相手である株式会社おおひなたの専務、大日向知廣さんの二人だけ。

しかも相手は、見るからに上質なスーツを着こなした大人な上に、上流階級の匂いのする超イケメンとなれば誰だって緊張する。ましてや、これまでまったく男性に縁の無い生活をしてきた私は、一体どんな会話をすればいいのか思い浮かばない。

何より……目の前の大日向知廣という男性は、私の好みどストライクなのだ。

大日向さんは一五五センチの私が見上げてしまうほどの長身。額にかからないようにきっちり整えられた髪は清潔感を醸し出し、その下にはうっとりするほど端正なマスクがある。挨拶を交わした時に聞いた声は低く艶やかで、耳元で囁かれたら腰が砕けてしまうかもしれない。

事前に写真は見せてもらっていたけれど、実物は写真よりも断然素敵で、対面した瞬間、しばらく言葉を発することができなかつたくらいだ。

あまりの衝撃に、叔母がお互いを紹介する言葉すら右耳から左耳にスルー。結局何を言われたのかわからないまま叔母は部屋を出て行き、彼と二人きりにされてしまったというわけだ。

鮮やかな朱色に色とりどりの花をちりばめた振り袖の膝の上を無言で見つめている私に、大日向さんがそつと声をかけてくる。

「玲香さん、とお呼びしてもよろしいですか？」

「はっ、はい!!」

突然、美声で名前を呼ばれて、思わずびんと背筋が伸びる。

「このお話を進めるかどうかの前に、いくつか確認しておかなければならないことがあります。よろしいですか？」

話し方が穏やかで、かなり好印象である。

勝手にドキドキと跳ねる心臓をなんとか落ち着かせて、私は平静を装った。

「はい、どうぞ」

でも装いきれなくて、変に声がうわずってしまった。

そんな私に一瞬だけ薄い笑みを浮かべた知廣さんが、改まった調子で口を開く。

「玲香さんまずにご存じと思いますが、私の実家はこの店をはじめとした料亭や、デパ地下などに出品している惣菜店などを経営しております。現在、私の父が全ての経営を担っていますが、二、

三年後には全て私に譲りたいと公言しています。無論、私もそのつもりでおります」

「はい」

特に疑問を感じることもなく、私はこつくりと頷く。

「それを踏まえた上でお話しするのですが……我が家やに嫁よめいだ女性は、将来的にこの料亭『おおひなた』の女将おかみになるのが習なまわしとなつていきます」

大日向さんは私の目を見て、きつぱりと言った。

「女将おかみ、ですか？」

「はい。もちろん適性もありますので強制ではありません。ですが、このお話を進める場合は、そういう可能性があることを知っておいていただきたいのです」

「……わかりました」

素直に頷くと、すぐに大日向さんが話を再開する。

「あともう一つ。結婚後なのですが……これもやはり我が家やのしきたりで、長男である私は両親、祖父母と同居しなくてはなりません。そのため、必然的に新居は私の実家となります。この二つが結婚の話を進める上での条件になります」

「同居が条件ですか……」

「このご時世に古くさいことをと思われるかもしれませんが、それが私の希望でもあるのです。ですから、無理と思われるなら、遠慮無く断つてくださって結構ですよ」

同居が条件という話は、このお見合いを仲介してくれた叔母から事前に聞いていた。なので、驚

くことも無理とも思わなかった私は、即返事をする。

「大丈夫です！ 私、大日向さんの仰おつやるとおりにします」

私の素早い返答に、大日向さんが驚いたように目を見開く。

「玲香さん、返事はすぐでなくていいのですよ。あなたの人生を左右することなのですから、もっとよく考えてから……」

しかし、私の頭に断るという選択肢は微塵みじんも無かった。

いや——むしろ、こんな素敵な方との縁談を断つたら、もう二度と理想の相手に巡めぐり会えないような気がする！

私は前のめりになりながら、目の前に座る彼の目を見つめた。

「いえ、本当に大丈夫です！ 私の家も三世代同居ですから、ご家族と一緒に暮らすことに抵抗はありません。それに家族を大切にされるのは、素敵だと思えます！」

思っていることをはっきり告げる。すると、しばらく黙って私を見つめていた大日向さんの口の端が、少しずつ歪ゆがみ始めた。

「知廣です」

「え？」

「大日向ではなく、知廣と呼んでください。玲香さん」

「知廣さん……？」

名前を呼んだ瞬間、知廣さんの表情が緩ゆるむ。その顔がまた素敵で、私の心臓は彼によってがっし

りと掴まれてしまった。

——はうん……すてき……!!

「……では、玲香さんはこの話を進めても問題無いと？」

「はい、喜んで！」

うっとりしたまま返事をしたら、居酒屋の店員みたいになってしまった。言ってから「あっ」と思い知廣さんを見ると、呆気にとられたような顔をしている。

人生の大事な決断を、あんな言葉で即決してしまったことを変に思われたのだろうか。

——だって、絶対にこの人と結婚したいと思っただもの……! ああ、知廣さんに幻滅されてたらどうしよう……

今更ながらに居たたまれなさを感じて視線を泳がせていると、目の前の知廣さんが「ふっ」と声を漏らした。

——あれ……もしかして今、笑われた？

「玲香さん……本当にいいのですか？ 結婚してからやっぱり嫌だと言われても、世間体というものもありますから、そう簡単に離婚をすることはできませんよ？」

「もちろん、わかっています。それより、あの……知廣さんはどうなのですか？ 私が結婚相手て本当にいいのですか……？」

「私ですか？」

そう言うや否や、知廣さんの口角がくつと上がった。しかも興味深そうに私を見つめてくるから、

落ち着かなくなってしまう。

「私はこのお話をいただいた時から、あなたは家柄も器量も申し分ない、私には勿体ないくらいの方だと思っていました。だからこそ……こうもあっさり話が進むと考えていなかったのですが、正直とても驚いています。逆に聞きたい。玲香さんがこの話を受けた決め手はなんですか？」

——あなたに一目惚れしたからです！

と素直に言うのは、さすがに恥ずかしい。悩んだ末に、私の口から出た言葉は——

「……か、勘です」

「……ん？ なんと？」

聞こえなかったのか、知廣さんが眉をひそめる。

「だから、その……勘です。お……女の勘です！」

そう言った途端、知廣さんがはつきりと笑みを浮かべた。

「玲香さんはそういう勘が鋭いのですか？」

「いえ……そういうわけでは、ないんですけど。でも、このお話を逃したら、絶対に後悔する気がして……」

「後悔？」

「あっ……」

知廣さんに突っ込まれてしまい、慌てて口を噤んだ。

正直に、決め手は一目惚れですって言ったなら、知廣さんはどう思うだろう。

初対面だし、引かれてしまうかもしれない。でも私の気持ちはちゃんと伝えなければ……

「ほんとに、冗談とかではなく……私、知廣さんと結婚したいと思っています……」

これだけでは、気持ち伝えきることではできないな……と彼を窺う。

がしかし、意外にも知廣さんは口元に手を当てて、興味深そうに私を見ていた。

「あなたのご実家は広大な土地を有する大地主であり、自社ビルを複数所有する資産家です。しかもあなた自身、まだ若くとても可愛らしい……。とくれば、この先も数多くの縁談があることでしょう。それでも、八つも年上の私との結婚を望んでくださるのですか？」

「はい……!! だって、知廣さんは私の理想の男性そのものなので……」

言ってからしまった、と口を手で押さえる。が、時すでに遅し。

目の前の知廣さんが、もう限界とばかりに嘔き出した。

「ご、ごめんなさい!! 私ったらつい……っ」

思わず身を乗り出してペコペコと知廣さんに頭を下げるが、まだ知廣さんは肩を震わせて笑っている。

変なことを言う女だと思われただろうか。不安な気持ちで笑い続ける彼を見つめていると、知廣さんが「謝らないで」と掌を私に向けてきた。

ようやく笑うのをやめた知廣さんは、改めて私を見つめてくる。

「いや、失礼。実に面白い方ですね、玲香さん。私はあなたの『理想の男性』なのですか？」

「は、はい！ それはもう、見事に！ 部屋に入ったら理想の方がスーツを着て座ってらっしゃっ

たので、私、驚きのあまり腰が抜けそうになってしまっ……」

すると知廣さんがフツと鼻で笑う。

「……これはこれは、なんとも正直な……」

ぼそっと呟いた知廣さんの表情が今までと違って見えて、あれ？ と思った。

気のせいか、さっきよりもすぐ柔らかくなってるような……

私がじっと彼を見つめていると、彼はニヤツと口角を上げた。

「わかりました。では、このお話を進めさせていただきます。よろしいですか？」

「はい、喜んで!!」

私の返答に、「二回目……」と呟いた知廣さんが再び肩を震わせる。

「あなたとなら楽しい家庭が築けそうな気がしますよ。玲香さん」

そう言っ知廣さんは不敵な笑みを浮かべた。その、男の色気にくらくらした。

——現実世界にこんなに素敵な殿方が存在しているなんて、本当に夢のようだわ……!!

夢見心地の私は、その後、知廣さんから料亭の敷地にある庭園を案内してもらった。

「この庭は、季節ごとに違う顔を見せてくれますが、私は春が一番好きですね。桜はもちろんです、ツツジの花が庭一面に広がってとても美しいんです。ぜひ玲香さんにも見ていただきたい」

「まあ……そうなのですね。ぜひ、拝見したいです……」

彼が見所を説明してくれる間、なんとか気力を振り絞って会話のキャッチボールをする。しかし、男慣れしていない私はすっかり彼の色香にあてられてしまい、会話の内容などは何一つ頭に入っ

こなかったのだった。

それから私達は家族も交えて結婚の意思を確認し、私の大学卒業を待つて結婚することになった。卒業までの期間、知廣さんとはデートをしたり、会えない日はメールや電話のやりとりをしたりして、少しずつ距離を縮めていった。

そして、お見合いから数か月後——無事大学を卒業した私は、夜景の見えるレストランで知廣さんから指輪を渡され、改めて「結婚してください」とプロポーズされたのだ。

その時は、昇天してしまいそうほど幸せだった。

身内だけの神前式を行い、私の親族や友人など親しい人だけを集めた披露宴も済ませた。

そしてついに、彼との新生活が始まる。

だが、私達……否、主に私にとって、本当の夫婦になるための試練はここから始まるのだった。

—

結婚式の翌日に入籍も済ませ、晴れて大日向家の嫁になった私、英玲香改め、大日向玲香。

これから大好きな知廣さんの妻として新しい生活が始まる。

引越当日、荷物は事前に業者さんをお願いしてあったので、私は単身大日向家に向かった。

知廣さんは家まで迎えに行く、と言ってくれたのだが、彼も忙しいだろうと考えて丁重にお断りした。

——これからずっと一緒にいられるんだし、引越くらい彼の手を借りなくても大丈夫！

なんて思いながら一人で純和風建築の豪邸である大日向家の門をくぐった私なのだが、出迎えてくれたお義母様の反応は、予想していたものとはちょっと違った。

「いいですか、玲香さん。知廣と正式に結婚したからはあなたは大日向家の一員です。よって今日からはもうお客様扱いはしません。一日も早く知廣に、そして大日向家に相応しい嫁になつていただきますので、そのつもりでいてください」

お義母様に連れられてリビングに移動した私は、出されたお茶に手を付ける間もなくこう言われた。

「ご挨拶に伺った時はいつも笑顔で、物言いもとても穏やかな印象だったけど、今日は表情が硬く声も低い。」

そんなお義母様に若干戸惑いはしたが、もちろん私もそのつもりで嫁いで来たので反論はない。

「はい、お義母様。一日も早く、この家の嫁として認めていただけるよう、精一杯努力いたします」

笑顔で応えた私に頬を緩めたお義母様は、テーブルの上に置いてあった冊子のようなものを差し出してきた。

「これは、我が家の嫁として、あなたに覚えていただくことを纏めたものです。細かく記しておき

ましたから、早く覚えてこの家に相応しい嫁になれるよう精進してくださいね」
冊子を手にとった私は、その表紙に釘付けになった。

【大日向家の嫁とは 上】

——すごい厚み……しかも上つてことは、下もあるの……!? それにこの筆文字、もしかして全
てお母様の直筆……?

さすがに戦慄し、体中の毛穴から汗が噴き出してくる。……いや、もちろん想定内ではあるのだ
が、まさかここまでとは思わなかった。

「あ……ありがとうございます、頑張ります」

「では嫁修業は一週間後から始めますからね。よろしく願いますよ」

「えっ?」

嫁修業とはなんぞや?

何気なく聞き返したら、お義母様の目が鋭くなった。

「何か問題でも?」

「いつ、いえ、なんでもありません!」

厳しい声に、ぴんと背筋が伸びる。どうやら質問が許される雰囲気ではなさそうだ。

お義母様は私をチラッと見た後に、フー、と小さく息を吐いた。

「うちは商売もあるから、覚えていただくことが山のようにあるの。家の仕事にある程度慣れたら、
店の仕事も覚えていただきますからね。よく読んでおいてちょうだい?」

「はい、お義母様」

「それとですね……」

お義母様がさらに何か言おうとした時、リビングのドアが開く音がした。そちらを見れば、スー
ツ姿の知廣さんが入ってくるどころだった。

お仕事モードの知廣さんは、これまで私が見てきたプライベートな彼とは印象が違う。

いつもよりきつちり纏められた髪に、ダークな色合いの三つ揃いスーツを着た知廣さんに、私の
目は釘付けになる。

——はわわわ……か、格好いい……知廣さん、素敵すぎます……!!

お義母様の前だということも忘れ、私は知廣さんから目が離せなくなった。

「お母さん。玲香は来たばかりなんですから、それくらいにしておいてください」

「知廣。あなたいつから……」

突然現れた知廣さんにお義母様も驚いているみたいだった。

「今、仕事を抜けてきたところです。初日からお母さんのペースで物事を進めるのは、まだ難しい
と思いますよ」

「何を甘いことを言っているんです。あなたはわからないかもしれないけれど、こういうことは最
初が肝心なのよ」

「肝心かどうかはさておき、彼女は大日向の嫁である前に私の妻ですから。それをお忘れ無きよ
うに」

知廣さんにびしやりと窘められて、お義母様がぐつと口を真一文字に引き結ぶ。

知廣さんとお義母様の間に流れる空気がピリピリ始める中、私は知廣さんに『玲香』と呼び捨てにされたことが嬉しくて、一人じーんとその喜びに浸っていた。

——ウワアア……玲香。だって……!! 家族以外の男性に呼び捨てにされたの初めて……!!
いつの間にかこちらへ近づいてきた知廣さんが、私の手を掴んだ。

「行きましょう。この家の中を案内しますよ」

「あっ、はい。お義母様、お話の途中で申し訳ありません」

お義母様に頭を下げると「いいわ。お行きなさい」と、仕方なさそうに言われた。

「玲香さん、ここに段差があります。足下に気を付けて」

「は、はい」

——あれ、また『玲香さん』に戻っちゃった……

少し残念な気持ちで彼の後をついて行くと、いきなり知廣さんに謝られる。

「来て早々母が申し訳なかった。気分を悪くしたのではないですか？」

そう言って、心配そうな視線を送ってくる知廣さん。その優しさに感激しながら私は首を横に振った。

「いいえちつとも。お義母様も仰っていましたが、厳しく接してくれるのは私を大日向家の一員として認めてくださった証ですから、とても嬉しかったです」

「そんな風に思ってくれてよかったです。母の物言いのキツさは今に始まったことではないので、私達

家族は慣れてしまっているのですが……。もし玲香さんを傷つけるようなことを言ったら、母に遠慮などせず私に相談してください。いいですね？」

「は、はい……!!」

——知廣さん、優しい……!! 好き……!!

こんな素敵な方の妻になったなんて、今でもまだ信じられない。でも、これは夢ではないのだと喜びを噛みしめる。

ふわふわと頭の中がお花畑になりかけたところで、ハッと我に返った。

「あっ、そういえば知廣さんお仕事では？ ここに来ちゃって大丈夫なんですか？」

半歩先を歩く知廣さんに声をかけると、彼は肩越しに私へ視線を送ってくる。

「結婚したばかりの妻が引越してくるのに、出迎えない夫なんて冷たすぎるでしょう。さすがに私はそんな夫になりたくないのですね」

「えっ、そうですか？ 私はそんな風には思いませんけど……」

「玲香さんはおおらかだな。まあ、そんなところがあるあなたの良いところでもあります」

知廣さんは広い大日向家の中を一通り案内した後、私と彼の居住スペースとなる二階へ移動した。

「同居とはいえ、二階を使用する者は私達以外にいないのですね。ここでは家族に気兼ねなくゆつくり過ごしてください」

木製の手すりのついたし字階段を上りながら彼の言葉に頬を赤らめる。だってそれって、二階は私と知廣さんの二人だけの空間ということだ。私の胸のドキドキがさつきよりも激しくなる。

——ど、どうしよう……これから一緒に暮らすっていうのに、側にいるだけでこんなにドキドキしてしまうなんて。私の心臓がもたないかも……!

そんな心配をしていると、先を行く知廣さんが私に声をかけてくる。

「ここが二階のリビングです」

知廣さんが階段を上がってすぐの木製のドアを開く。

私の視界に飛び込んできたのは、白で統一されたシンプルなりビング。ソファアームもテーブルも、とてもおしゃれなデザインですごく目を引く。はつきりいつてかなり私好みだ。

「わあ、素敵……!」

テンションの上がった私は、促されるまま部屋の中へ進みソファアームにそっと触れてみる。柔らかくなしザーは眩しいくらい白くてシミ一つない。

「あの、もしかしてここにある家具って全部新品だったりします? 知廣さんが選んでくれたんですか……?」

「ええ。本当ならあなたと一緒に選んだのですが、引越しまでの時間があまりなかったのでこちらで選んでしまったんです。もし気に入らないようでしたら交換することも可能ですよ……」

言いながら、知廣さんが申し訳なさそうな顔をする。が、そんな心配は無用である。

「とんでもない!! どれもすごく私の好みです!! 素敵な家具を選んでくださってありがとうございます!!」

私がお礼を言うと、知廣さんはホッとしたように柔らかく微笑んでくれた。

「そうですか。そう言ってもらえてよかったです」

その微笑みがキュンキュンしちゃうくらい素敵で、私は心の中で大いに悶える。

——あーん、素敵……!! 知廣さんの笑顔は私のご馳走です……!!

彼が私のために選んでくれた。そう思うだけで、私の中から幸せホルモンのセロトニンがどくどく分泌されてくる。とてもとても幸せ。

連れだってリビング内の扉を開けると、そこには立派なキッチンがついていた。

「はっ!! 二階にもキッチンがあります……!」

一階にすぐ大きくて立派なキッチンがあったのに、二階にもあるなんて。

「ちよっと小腹が空いた時や、お茶が飲みたい時にいちいち一階に行くのは面倒でしょう? それに玲香さんはお菓子作りが好きだと釣書に書いてあったのを思い出してね」

——私のことを考えてキッチンを……?」

彼の優しさと気遣いに胸がキュッと締め付けられる。幸せすぎて体が震えてきた。

「ありがとうございます、知廣さん。何から何まで……あの、知廣さんお菓子は好きですか……?」

「お菓子ですか? ええ、たまにいただきますよ。ブラウニーなんか好きですね」

ブラウニーを頭に思い浮かべる。知廣さんとブラウニー……合う!!

「ブラウニーですね、じゃあ、今度お作りします!」

私が満面の笑みを浮かべて返すと、知廣さんがクスツと笑ってくれる。

「はい、ぜひ。楽しみにしています。さて、次は寝室ですね。玲香さん、こちらへ」

幸せに浸る私を見てフツと笑った知廣さんが、そう言って歩き出す。慌てて後に続くと、彼はリビングの奥にある扉を開けた。

「ここが寝室です。どうぞ」

「は、はい……失礼します」

ドアを開けてくれた彼の横からスルリと寝室に入る。視界に飛び込んだきたのは、私を実家で使用していたダブルベッドよりもさらに大きい、おそらくキングサイズはあろうかという大きなベッドだった。

「ベッドも新調したんです。これぐらいの大きさがあれば、お互いゆったりと眠れると思ったんですが、どうでしょう」

「ゆ、ゆったり……確かに！ これならお互いゆつくり眠れますね……」

特に表情を変えず、サラツと言ってくる知廣さんに相槌を打つ。

当たり前のように一つのベッドで一緒に寝ると言われて衝撃を受ける。でも考えてみれば、夫婦になったのだから一緒に寝るのは当たり前だろう。

なんだか、想像したらドキドキして顔が熱くなってきてしまった。

——こっ、今晚から知廣さんとのベッドで、一緒に……！

そう思うと途端に体に緊張が走って顔が強張る。それに何より今夜は新婚の私達が初めて一緒に

過ごす夜。いわゆる初夜なのだ。

実は今日のこの日まで、私と知廣さんは体の関係になることはおろか、キスすらしていない清い関係のままなのである。

結婚式も披露宴もしているのになぜ今日が初夜なのかというと、私にもよくわからない。ただ、これまでもデートの際にいい雰囲気になりそうな時に限って、知廣さんに予定が入ったり、私の帰りを心配した過保護な父から電話が入り帰宅を促されたりした。結婚式の後も、彼の仕事の都合で別々の家に帰ることに。そのおかげで同居を開始する今日まで、プラトニックな関係を維持することになってしまったのだ。

まったく男慣れしていない私ではあるが、何回かデートを重ねるうちに一度くらいは体を求められたりするんじゃないかと、期待(?)していたところもあった。

だけど、そんな気持ちとは裏腹に知廣さんが私に触れることはほとんどなかった。

これにはさすがの私も、不安を抱かざるを得なかった。なんせ恋愛経験が皆無の私には、これが普通なのかそうでないのかもわからない。

でも、知廣さんは会えば優しく接してくれるし、常に私を気遣ってくれる。今日だって忙しい中、仕事を抜けてまで出迎えに来てくれた。

何が正解かなんて私にはわからないけれど、少なからず彼から思われているのは感じ取れる。

お見合い結婚の私達はこれからじつくりと関係を深めていけばいい。夫婦生活はまだ始まったばかりだし。……そう結論つけて今に至る。

——悩んだ時もあったけど、今こうして知廣さんの側にいられる。それだけで、私は充分幸せです……！」

そんなことを思いながら近くにいる知廣さんを見つめ、うつとりする。

「玲香さんの荷物ですが、寢室の隣にあるウォークインクローゼットに纏めてあります。小物などは、ウォークインに備え付けの収納棚を自由に使用してもらって構いませんから」

「は、はいっ。わかりました！」

幸せで意識がどこかに行っている間に、知廣さんがテキパキと指示を出してくれていた。

——いけないわ、私ったら……今はぼんやりしている場合じゃなかった。

知廣さんに言われて改めて、寢室の奥にあるウォークインクローゼットをチェックする。クローゼットとはいえ、優に大人一人分の布団が敷けてしまえそうなほどの広さがあった。

引っ越しにあたり私物を減らし、持ってくる荷物を厳選してきたので問題無く入りそうだ。

それにしてもさすが大日向家。どこもかしこも広い！と感心しながら振り返ると、ちょうど私の後ろにいた知廣さんにぶつかってしまった。

「きゃっ！も、申し訳ありません……」

ぶつかった鼻を手で押さえながら知廣さんを見上げると、彼は優しく微笑み、私の肩にポンッと手を乗せた。

「申し訳ありません、なんてそんな仰々しい。私達はもう夫婦なのだから。ね、玲香さん」

ね、と私に同意を求める知廣さんの目がとても優しくドキドキする。

私は彼から視線を外せないまま、小さく何度も頷いた。

「は、はい……そうですね、私達もう夫婦なんですよ。あつ、じゃあですね、知廣さんも私のことは『玲香』と呼んでください。それに敬語もやめてくださると嬉しいですよ」

私に気を遣ってくれるのは嬉しいけど、なんとなく他人行儀な気がする。できたら、もっと気楽に話しかけてほしい。

「わかった。癖でたまに敬語が出てしまう時があるかもしれないが、努力する。玲香も俺のことは好きに呼んでくれて構わないから」

知廣さんはにっこりと微笑み、私のお願いを聞いてくれた。

「わ、私はもうしばらく知廣さんのままでお願いします」

——さすがに彼を呼び捨てにするとか、無理だ。ハードルが高すぎる！

おずおずと申し出ると、彼はフツと軽く笑う。

「わかった。君の好きなようにするといっ」

「ありがとうございます。でも、ちょっと話し方を変えるだけでだいぶ変わりますね。少し夫婦らしくなった気がするかな、なんて……」

「夫婦らしく、ね」

何やら小さく呟いた知廣さんの顔が、私の耳に近づく。耳に吐息がかかり、驚いた私はびくんと肩を揺らした。

「ち、知廣さん……？」

「さつき、ベッドを見て赤くなっていたでしょう。玲香は何を考えていたのかな？」
「えっ！」

驚いて知廣さんを見れば、口元に笑みを湛えながら私の返事を待っている。
「やつ……その！ 大きいベッドだなんて、おもっ……」

初夜のことを考えていた、なんて言えるわけない。動揺してしどろもどろになっている私を見て、知廣さんが可笑しそうに頬を緩める。

「本当に？ 何か違うこと考えていたんじゃない？」

そう言っただけで意味ありげな視線を送ってくる知廣さんに、私の心拍数が急激に上がる。

「かつ……そんな……ちよっ、ちよっただけです！」

彼の視線にテンパった私は、つい正直に白状してしまう。

いつもと違う知廣さんに、私の調子も完全に狂ってしまったようだ。

「相変わらず玲香は面白いね。でも、こうなんでもかんでも顔に出してしまうのは少々困りものだな」

「えっ!? 私そんなに顔に出ますか？」

「出てるよ。さつきは、まるで桜の花のように頬を赤く染めていた。でも……」

いつの間にか距離を詰めた知廣さんが、私の顎をくいつと指で持ち上げる。

「こんなに可愛い顔は、俺以外の男に見せてはいけないよ。いいね？」

彼の言葉と妖艶な視線に、ぞくりと皮膚が粟立つ。返す言葉に詰まった私は、返事の代わりに何

度も小さく頷いた。

そんな私に、顎から手を離れた知廣さんがクスツと笑う。

「妻の期待に応えたいところだが、さすがに引越して来たばかりで疲れている君に襲いかかるようなことはしないよ。今夜はゆっくり休むといい」

「えっ？」

——今、しないって言った？

「じゃあ、悪いけど仕事に戻るよ。夕方には戻るから、夕食は一緒に取ろう」

「は……はい」

知廣さんはキョトンとしたまま動けない私の頭を一撫でした後、部屋から出て行った。

広い部屋に一人残された私は知廣さんの言葉が気になりつつも、とりあえず手つかずの自分の荷物を片付けることにした。

夕食は一階の食堂で家族揃って取るそうだ。

六人掛けの大きなダイニングテーブルが中央にある広い部屋では、給仕を担当する年配の女性が忙しなく働いていた。なんと、この家の食事は全て住み込みで働いている方が作ってくれるのだという。

『母は定休日以外、この家の隣にある料亭おおひなたで女将をしているんだ。だから一緒に夕食を取るの、祖父母と父と私達の五人だよ』

事前に知廣さんから聞いていたとおり、お義母様を除いた家族五人が席についた。

おおひなたを創業したお義祖父様と、それを引き継ぎ事業を拡大して、さらに大きく成長させたお義父様。その息子の知廣さん。そしてお義祖母様に囲まれつつ、新入りの私は緊張しながら嫁いで初めての夕食をいただく。

大日向家の食事は基本和食。品数が多く、いくつもの小鉢が目の前に置かれる。お義祖父様もお義父様も元々は料理人だったそうで、味に関してはとても厳しいらしい。

一人息子の知廣さんは料理の道ではなく、ゆくゆくは家の会社経営をするために大学は経営学部に行ったとデートの時に聞いた。

食事中、お義祖父様とお義父様はポツポツ喋る程度で私にはほとんど話しかけてこない。でも、喜寿を迎えたばかりのお義祖母様は気さくに声をかけてくれる。お気に入りのお蕎麦屋さんが入っているのが私の実家の持ちビルだと知るや否や、パアツと表情を輝かせた。

「あら、そうなの!? 私あのお蕎麦屋さんがこの辺りでは一番美味しいと思ってるのよ」

「はい、私もそう思います。それに、あそこは天ぷらもとっても美味しいですし」

「そうそう、天ぷら! 美味しいわよねえ。後ね、私あの店の蕎麦がきが好きで……」

「お祖母さん。その調子で話しかけ続けたら、玲香が食事できませんよ」

苦笑しつつ、知廣さんがやんわりとした口調で会話を割って入る。

「どうやら知廣さんは、家族に対しても敬語で話すようだ。」

「ああ、そうね。ごめんなさい、玲香さん。この件についてはまた今度改めてお話ししましょう。」

ゆっくり食べてね」

「はい。ありがとうございます」

お義祖母様と知廣さんの優しさに感謝しつつ、手の込んだ夕食を堪能した。

食後は煎れてもらったお茶を飲みつつ、しばしの団欒タイム。

相槌を打ちながら話に耳を傾けていたら、お義父様が「今日は夫婦でゆっくりしたらいい」と言ってくださった。

丁寧に挨拶をして食堂を出た私は、知廣さんと一緒に二階のリビングへ移動する。

部屋に入るなり、急に二人きりになったことを意識してドキドキしてしまう。そんな私に、知廣さんが声をかけてきた。

「玲香は、食事の後、いつもどんな風に過ごしてる?」

「えっ、私ですか? そうですね、これまでは家族でお茶を飲んだり、一緒にテレビを観たりして過ごしていました。気分によつては、自分の部屋に籠もることもありましたか……」

「そう。テレビを観るなら、いくつか動画配信サービスに加入しているから、利用するといいよ」

リモコンを手にした知廣さんが、動画を観る方法を教えてくれる。

しかし、両親が結構なアナログ人間だったため、私もこういうものに関してはずぼりだ。

映画は映画館で観るか近所のレンタルショップで借りる——という認識だったから、家でいつでも映画やドラマが観られると聞いて感動してしまった。

「す、すごい……! こんなに色々観られるなんて! 素晴らしいサービスですね!」

リモコンを持って興奮する私に、知廣さんは呆気にとられた表情を見せる。

「……玲香が住んでいたのは、同じ日本だと聞いていたが」

「……す、すみません、私こういうの、本当に疎^{うと}くて……」

「君、スマートフォンを使っているだろう。加入している配信サービスはそちらでも利用することができるよ」

「えっ？ そんなこともできるんですか？ 私、あんまりスマートフォンを使いこなせていないので、そういう機能があるなんて知りませんでした」

通話とメールと、友人の撫子^{なごし}さんに教えてもらった通話アプリくらいしか使っていない。

その他の機能が眠ったままになっているスマートフォンは、はつきり言^いって宝の持ち腐れではないと常々思っている。

しばらく私を見ていた知廣さんが、徐々に肩を震わせ始めた。

「なんだか、らしい、ね」

「ま、また笑われてますね、私……お恥ずかしい……」

しょぼんと肩を落とすと、知廣さんの大きな手が私の頭を優しく撫でた。

「恥ずかしくなんてないから。少なくとも、俺は可愛いと思っ^いているよ」

彼の手の温もりが頭からじんわりと伝わってくる。そのせいだろうか、私の顔に熱が集中してきた。

——知廣さん、や、優しい……!! もう、大好き……!!

「ち、知廣さん……」

「ちなみに、どんな映画が好きなの？」

思わず、好きです、と口に出しそうになった瞬間、彼が質問を被せてくる。

「えっ？ あ……ゾ、ゾンビ映画とかのホラー、です」

一瞬真顔になった後、知廣さんの口元が可笑^{おか}しそうに歪^{ゆが}む。

「……玲香は意外性の塊^{かたまり}みたいだな」

知廣さんはそう言^いって、口元に手を当て再び肩を震わせた。

その後、テレビやブルーレイなどの操作方法を教わっているうちに、気がついたら夜の十時を回っていた。

引越^ひ越し初日だし、早めに寝た方がいいと言う知廣さんに従い、先にお風呂に入らせてもらう。……けど、彼と一緒に寝ると思うとどンドン緊張してきた。

——どど、どうしよう、緊張して口から心臓が飛び出そう……

体を洗いながら、ふと昼間の知廣さんの言葉を思い出す。

——何もしない^いって言^いってただけど、本当かな……。でも、同じベッドで寝ることには変わりないんだよね……？

もう一度念入りに体を洗ったり、鏡で体のラインをチェックしたりしていたら、あつという間に一時間ほど経^へってしまい慌^{あわ}ててバスルームを出た。がしかし、今度は脱衣所に置いてあるバスローブに頭を抱えることに。これを着て出た方がいいのかどうか悩んでしまう。

——実家ではパジャマだったから、バスローブって着たことがないのよね……

悩んだ末、寝る時のことを考えて持ってきたパジャマに着がえてリビングに戻った。そこには、ソファアに浅く腰掛けてパソコン作業をしている知廣さん。

「遅くなってしまつてすみません。知廣さん、お風呂どうぞ」

「ああ……うん。ゆつくりできた？」

「はい。浴槽がすごく広くて快適でした」

「そう。それはよかった」

パソコンを閉じながら微笑んだ知廣さんは、ソファアから立ち上がるとこちらに向かつて歩いてくる。

そしてすれ違いざま、私の頭に顔を近づけた。

「いい香りがする。シャンプーかな？」

「えっ！ か、香りですか？ いつも使っているものなので私にはよくわからなくて……」

自分の髪を一房掴み香りを嗅いでいると、知廣さんが私の耳元でこそつと囁いた。

「先にベッドに入つて。すぐに行く」

——えっ、ええ!! それって、まさか……

慌てて振り返るも、知廣さんの姿はすでに無かった。だけど確かに、先にベッドへ、と言われた。こういうことは……ついに、初夜……!?

それを意識した途端、私の心臓が再びどつくんどつくんと大きな音を立て始める。

——昼間は何もしないつて言つたけど、やっぱり……!?! ど、どうしよう、私どんな顔で待つていれればいいの……

「こ……こうしちゃられないわ、とりあえず寝室へ」

急いで寝室に移動して、慌ててドレッサーで自分の姿を確認する。その後、緊張しながら一声、「お邪魔します」と言つてからベッドに体を滑り込ませた。

ベッドは弾力があつてめちやくちゃ寝心地が良さそうだ。それに、掛け布団もすごく柔らかくて気持ちがいい。思わず頬ずりしたくなつてしまう。

知廣さんの選んだものに間違いはないな……なんて思っていると、入浴を終えた知廣さんが寝室に入つてきた。

バスローブ姿の知廣さんは、生乾きの髪が色気を増大させている。さらにバスローブの合わせから覗く素肌が、なんとというか、え……えろ……い……い……

気づいたら彼をガン見していたので、私は慌てて彼から目を逸らす。

「お先に……お邪魔させていただいてます……」

「お邪魔つて。それより布団はどうだろう？ 軽くて温かいものを選んだつもりだけど、気に入つてもらえたかな」

「は、はい！ すごく肌触りがよくて気に入りました。ぐつすり眠れそうです」

知廣さんが髪をタオルドライしながら、間接照明を点けてベッドの端に腰を下ろす。

「それは何より。で、玲香。今日一日ここで過ごしてみてもうどうだった？ 何か困つたことや不安な

ことはある？」

「困ったこと……」

聞かれて、ついつい視線が枕元に置いてある、お義母様から渡されたマニキュアル本にいつてしまふ。困っているというより、ちゃんと覚えられるか不安で。それに気づいた知廣さんが、マニキュアル本を手を取った。

「大日向家の嫁とは……なんだ、これ」

彼は怪訝けげんそうな顔で、パラパラと本を捲めくる。

「今日、お義母様かあからいただいたものです。一日も早く、大日向家の嫁として認めてもらいたいのですが、思った以上に覚えることが多くて……。あ、でも、きちんと一週間後の修業には間に合わせますから！」

すると知廣さんの目が驚きで見開かれる。

「一週間後の修業……？ この本、家族の食の嗜好しこうまで事細ことこまかに書いてあるけど……いや、それにしてもこれは多いだろう」

知廣さんの表情がだんだん険しくなってくる。これはマズいと思った私は、慌あわてて彼の言葉を遮さえぎった。

「大丈夫です！ 私、やります」

「やるって……」

意気込んだ声を上げる私に、知廣さんが困ったように眉根を寄せる。それを見て、ちゃんと自分

の意思で修業をしたいと思っていると説明した。

「お見合いの時、将来的に女将おかみになるのが習なわしだと聞いていましたし。お義母様かあみたいに立派な女将おかみになれるか自信はありませんが、私なりに精一杯頑張りたいんです」

私の言葉を静かに聞いてくれていた知廣さんは、困った顔のままため息をついた。かと思つたら、いきなり布団を捲めくって、その中に体を滑り込ませる。

その途端、私の左半身がビクン！ と大きく跳ねた。

——わっ！ 急に……

「君は、意外と頑固だな」

「す、すみません……」

「いや……頼もしいよ。でも、辛くなったらいつでも言いなさい、いいね？」

「はい、わかりました！」

わかってもらえたことに安心して笑みを向けると、知廣さんの手が私の頭にぼん、と乗せられた。……可愛いな。玲香は

にっこりと微笑んだ知廣さんが、私の頭を何度も撫でる。

ドキドキしながらすぐ隣にいる彼を見つめた。ふと気づいたら、知廣さんと私の距離が随分と狭まっている。

——もしやこれは、キッ……キスの流れでは……？

そう意識した途端、私の体は緊張でこれまでにないくらい固くなる。

自分から目を閉じた方がいいのかどうかもわからなくて視線を泳がせていたら、知廣さんの顔がすぐ近くに迫ってきた。咄嗟に私は、ぎゅっと目を瞑る。次の瞬間、額に温かくて柔らかいものが触れて、すぐに離れていった。

「……………あれ？」

キスはキスだけど、おでこ？

たとおでこでも、キスをしてくれたのはすごく嬉しい。けど、キスと言えば唇のイメージだっただけに、どこか拍子抜けしてしまう。

恐る恐る目を開くと、さっきまですごく近くにいた知廣さんが私から離れていくところだった。

「今日は一日お疲れ様。ゆっくり休んで」

そして知廣さんは、枕元に置いてあった文庫本を手にする。

「これは……………どう考えても、初夜っていう雰囲気じゃない……………？」

「は……………はい。ありがとうございます……………」

私は布団に潜り込んで、彼に背を向けて横になった。

まあ、最初から何もしいって宣言されていたわけだし……………と、無理矢理自分を納得させる。

「……………そうよ。まだ新婚生活初日なんだし。これからよね……………」

気持ちを切り替えた私は「おやすみなさい、知廣さん」と声をかける。

すぐに知廣さんから「おやすみ、玲香」と、優しい声が返ってきた。その声音に安心した私は、引越し初日の疲れもあつてか、あつという間に眠りに落ちていった。

翌朝。気持ち良く目が覚めた私は、身支度を済ませて知廣さんと一緒に食堂へ移動する。

すでに、お義祖父様とお義祖母様。お義父様と、昨夜はいなかったお義母様が席にいた。

「おはようございます」

それぞれに挨拶をしてから席についた私に、着物をピシッと着こなしたお義母様から厳しい声が飛んできた。

「玲香さん、昨日差し上げたものは、全て読まれましたか？」

「えっ!? あ、あのマニュアルですか？ すみません、まだ三分の一くらいしか……………」

昼間は引越しの荷物の片付けに追われ、その合間に目を通していたものの、さすがに読み終えるまでにはいかなかった。

「……………いけない、私ったら……………せっかくお義母様がくださったのに、のんきに寝ている場合じゃなかった……………」

肩を落としてお義母様を窺うと、矢のような鋭い視線に射抜かれる。

「玲香さん。そのようにのんびりしていいのですか？ 今日はいもう一冊お持ちしたのですよ」

そう言いながらお義母様が差し出してきたのは、昨日いただいたマニュアルの下巻。それを目にした私は、思わず固まる。

「……………上巻より分厚い……………」

お義母様は、呆れた様子でため息をついた。

「これだから最近の若い子は……やつぱりこんな若いお嬢さんにうちの嫁は務まらないので……」
「お母さん。いい加減にしてください」

お義母様の言葉に被せるようにびしやりと言いつつ放ったのは知廣さん。なんだか怒っているように感じるのはいささかだろうか。

「玲香は昨日引越して来たばかりなんですよ？ いきなりそこまで厳しくする必要はないでしょう。今の態度はどう見ても嫁いびりをする鬼姑おいぢにしか見えませんでしたよ。ねえ、お父さん」

「なっ……知廣！」

お義母様が眉を寄せて、羞恥しゅとじなのか怒りなのか顔を赤らめる。

同意を求められたお義父様は、一瞬驚いたような顔をしたものの、言いくそくに口を開いた。

「まあ……な。今のは母さんが言い過ぎだ。別にそこまで急ぐことはない」

二人に責められたお義母様は、あからさまに不機嫌になり軽く口を尖らせる。

「……二人してなんですか、嫁の肩持つて……」

思いつきり場の空気が悪くなってしまい、さすがにこれはマズいと焦ってしまう。

私は両手を太股に乗せて、お義母様に向かって頭を下げた。

「すみませんお義母様！ 私がトロイのがいけないんです」

「玲香」

知廣さんが心配そうな顔でこちらを見る。それを視線で「いいんです」と訴える。

「今日一日で全てに目を通します！」

私が明るくこう言うと、不機嫌だったお義母様の表情が、少しだけ和らいだ。

「そう。じゃあ……頑張ってください」

そう言ってもらえてほっと肩の力を抜くことができた。

朝食後、二階のリビングに戻ったところで知廣さんに呼び止められた。

「玲香。母の言いなりになる必要はないんだよ。女将おかみだってすぐ交代するわけじゃない。なにせ母がまだ現役バリバリだからね」

いつになく心配そうに私を見つめる知廣さんに、胸がドキドキした。

——こんなに私のことを心配してくれるなんて……嬉しい……！

「知廣さん、ありがとうございます。でも、無理はしていいないので大丈夫ですよ！ 荷物もだいぶ片付きましたし、今日はお義母様を作ってくださいだったマニュアルにしっかり目を通そうと思います」

明るく言うと、困ったように微笑んだ知廣さんの腕が私の体に巻き付き、抱き締められた。

——キャ——！！ 知廣さんの腕が、体がああ——！！

こんなに彼と密着したのは初めてで、私は激しく動揺してしまふ。

「……無理だけはしないように。いいね？」

「は、はい……！！ かしこまりました……！！」

本当に、本当に。知廣さんが大好きだから、あなたのためなら頑張るんです、私。

この日は一日をかけて、お義母様からいただいた【大日向家の嫁とは 上・下】を読破した。大

日向家の嫁とはどうあるべきかというお義母様の熱い思いが、これでもかというくらい詰まっ
て、読み終えた私の胸も熱くなった。

——大日向家の発展の裏には、常に妻の内助の功があった。

お義母様はそれを重く受け止めているからこそ、私にも知廣さんを支えなさいと言いたいのだわ。
私も一日でも早く、知廣さんを支えられるような妻になるべくもつと精進しない……!!
強く決意した私は、一週間後の修業開始に向けてマニユアルを読み込んでいく。

そうして迎えた二日目の夜。

昨夜は残念ながら何もなかった私と知廣さんだが、もしかしたら今夜こそ初夜を迎えられるので
はないか——夕食後リビングに移動してからというもの、意識してついそわそわしてしまう。

対する知廣さんというと、いつもと全然変わることなく、ソファでタブレットやパソコン
を操作している。

果たして、ここから甘い雰囲気になるのだろうか？ と疑問に思い始めた時、時計を見た知廣さ
んが顔を上げた。

「玲香、そろそろ寝室に移動しようか。風呂は先に入ってくれていいよ」

「は……はい!!」

彼に促されて、私は急いでバスルームに移動した。

——今朝は、なんだかい感じだったし、今日こそ……かもしれない!

昨日は引越してきたばかりの私の体を気遣ってくれたのだとしたら、今日はしっかり休ませて

もらったので、まったく問題ないし……

私はごくんと大きく喉を鳴らす。

昨日に引き続き入浴後、結婚する前に友人の撫子さんに選んでもらった勝負下着を身につける。
全身隈なくお手入れしてから寝室に行く。

私と入れ替わりにバスルームへ行った知廣さんをドキドキしながらベッドの上で待っていると、
彼は十分ほど戻ってきた。

「今日は一日中、母が作ったマニユアルを読んでいたのか?」

髪をタオルドライしながら、知廣さんが尋ねてくる。

「はい。全部読みました。お掃除の仕方とか、お世話になっっているお店のこととか、事細かに書か
れていたのでも勉強になりました。全部お義母様の手書きで、きつと、ものすごく大変だった
と思います。本当にありがたくて、頭が下がります」

素直に思ったことを口にする、ベッドに腰掛けた知廣さんは目を丸くし、眉を下げた。

「……朝、かなりの嫌味を言われていたと思うけど、そんな風に思えるなんて君はすごいね」

「そんなことないです。私なんて、妻らしいことも嫁らしいこともまだ何もしていないのに……」

「妻らしいこと、したいの?」

「ニヤッと悪戯っ子のような笑みを浮かべて、知廣さんが私を見つめる。」

「え?」

妻らしいことってなんだろう……とキョトンとした次の瞬間、あることに行き着いて顔から火が

出そうになった。

「えっ、えっ、え？ それ、は……」

狼狽うろたえているうちに、知廣さんの手が私の頬に触れた。

「玲香は可愛いな。こんなに可愛いのに、なぜこれまで男性と縁がなかったのかな？」

「な、なぜでしょう……周囲が女性ばかりでしたし、父や兄の目が厳しかったのもあるかもしれない……」

言い終えて知廣さんの目を見つめると、優しい視線を返される。

「こんなに可愛いあなたを妻にすることができて、俺は幸せ者だ」

彼の指が、私の頬を優しく撫でる。その感触が気持ち良くてちょっとくすぐったくて、私は小さく身を振よじった。

「知廣さんと結婚できて、私も幸せです……」

小声で言うと、知廣さんの綺麗な顔が近づいてくる。あつと思った時には、私の唇は彼のそれによつて塞ふさがれていた。

キスされていると認識するまでに数秒かかる。

男性の唇がこんなにも柔らかくて温かいものだと初めて知った。

「……玲香、目を閉じて？」

一旦唇を離れた知廣さんが、目尻を下げて言った。慌てて目を閉じると、今度は両手で頬を挟まれて、さつきよりも強く唇が押しつけられる。

「んっ……！！」

唇の間から肉厚な舌が差し込まれ、私の口腔こうくわうを蹂躪じゅうりつし始める。驚いて奥に引っ込んでいた舌を彼の舌に絡め取られ、何度も擦り合わされた。

その度に脳内に水気を帯びた卑猥ひわいな音が響いて、頭がクラクラしてくる。

——なに、これ……すごい……

「ふっ……んん……」

濃厚でこれでもかとエロスを感じさせる知廣さんのキスに翻弄まんろうされて、意識が飛びそうになる。

——ついに私、身も心も知廣さんの妻に……

彼が着ているバスローブの合わせ部分を掴つかんで、このまま初夜突入の覚悟を決めたその時だった。私の口腔こうくわうから彼の舌が消え、唇が離れていく。

——え……？ 終わり……？

あつさり終わってしまったキスに、思わず眉根を寄せてしまう。

「これくらいにしておこうか」

そんな彼の声が聞こえた後、私の頭にポンと手が置かれた。

目を開けた私はわけがわからず、目の前の彼を凝視する。

「……あの？」

「今日も疲れただろう。ゆっくり休むといい。俺は少しやり残したことがあるのでね、もうしばらく書齋で仕事をしてくるよ」

「え？ いえ、私そんなに疲れてな……」

「母の書いたあのマニュアルを全部読むのは大変だっただろう？ 無理はしないで、ね」

そんな風に気遣われてしまうと、なんとなく反論しづらい。

「あ……はい、わかりました……」

こう素直に返事はしたものの、さっきまですっかり初夜突入のつもりでいた私は、なかなか頭を切り替えることができない。

私から離れた知廣さんは、タオルを手にドアに向かう。そしてドアの前でこちらを振り返った。

「おやすみ、玲香」

いつもと変わらぬ優しい笑顔の知廣さんに、私は無理矢理口角を上げて笑みを浮かべた。

「お、やすみなさい、知廣さん……」

パタンと閉められたドアを見つめたまま、私はしばらく動くことができなかった。

——そ、そんな——！！

頭の中は「なんで抱いてくれないの!？」という疑問でいっぱいだった。

——どうして？ あそこまでしてくれたのなら、最後までしてくれてもいいのに。なんで……？
まさか、結婚してから触れてもらえないとは思わずじわじわと不安になってくる。

——知廣さん、私のこと本当はどう思ってるんだろう？ 初夜がない夫婦って大丈夫なの？ 何がいけないのかまったくわからないよ……

もう、どうしていいのか見当もつかない。

悶々とした気持ちと、彼が抱いてくれない不安から、私はふて寝するように布団を被った。

二

私が大日向家に嫁いでから一週間経ち、ついに嫁修業が始まった。

「では玲香さん。まずは床の間のお掃除からいたしましょうか」

「はい、お義母様」

この家の床の間にはおそらく値打ちものの、壺や大皿がいくつも並んでいる。それを常に綺麗に保つのは嫁の仕事なのだそう。というわけで私はお義母様に指導されたとおり、それらを一つずつ慎重に磨き上げていく。

「それが終わったらお庭の手入れをしますよ。いいですね？」

「はいっ！」

この家には隣にある料亭おおひなたに負けないくらい立派な庭があり、その管理も嫁の仕事。床の間での作業を終えた私は外に出て、庭を美しく保つべくお義母様の指導を仰ぐ。

この家の男性が何も心配せず外でしっかりと働けるよう、家のことは女性がきっちりやるというのが大日向家の考え方なのだ。

もちろん住み込みの使用者さんや料理人さん達もいるけれど、お義祖母様やお義母様がこの生活

をしてきたからこそ、今の大日向家、並びに『おおひなた』があるのだという。

——私の実家も先祖代々管理してきた土地を元にして資産を築いてきたんだもの。考え方は一緒だわ。

そう思ったら、自然と修業にもやる気が出る。一日も早く、大日向の嫁として認めてもらえるように頑張ろう。

だけど、そんな私の心は、大きな不安を抱えたままだ。なぜならば——いまだに知廣さんとの初夜を迎えられていないから。

——えーん。どうしてなの？ もう、わけがわかりません……!!

あれからも、知廣さんは一向に私に触れてくることはなく、毎晩ベッドでモヤモヤしっぱなしの日々を送っていたのだ。本当に、彼の考えがまったたくわからない……

結婚したら自然とそういうことを経験するものだと思っていたのに、なぜ知廣さんは私に手を出してくれないのか。

竹ぼうきで庭を掃きながら悶々もんもんしていると、お義母様の声が飛んでくる。

「玲香さん、あまり葉っぱが集まっていますよ。もっと力を入れてしっかりと掃いてちょうだい」

「は、はいっ!! 失礼いたしました!!」

——いけない、今はそんなことを考えている場合じゃなかった。しつかりしなきゃ……!!

お義母様に注意され、慌てて返事をし竹ぼうきを握る手に力を込めた。

そんなある日、お義母様にお使いがてらお休みをいただいた私は、ランチタイムを利用して友人の神野撫子さんと食事をするため、百貨店に入っている和食処に来ていた。

撫子さんは小、中、高、大と学生時代と同じエスカレーター式の学校で過ごした大親友だ。彼女は日本有数の大企業、神野グループに属する神野物産の社長令嬢だ。しかも、グループトップの神野ホールディングスを経営する神野家の血縁者。つまり彼女は私より遙かに名家でお金持ちな正真正銘のお嬢様なのである。

撫子さんは大学卒業後、この近くの神野ビルに入っている系列会社でOLをしており、私のためにランチ時間にここまで出向いてくれた。

「……お話はわかりましたけれど。そこでなぜ私に相談なのです？ 玲香さん」

平日ということもあり年配の女性が多い和モダンな店内で、注文した大盛りヒレカツ定食を前に、撫子さんが割り箸ばしを手に怪訝けげんそうな顔をする。

「だってこんなこと、撫子さんくらいにしか相談できないんですもの……」

私の前に置かれたのは普通盛りりのロースカツ定食。店員さんが去ってから、私も割り箸ばしに手を伸ばす。

「でも、あなたもご存じのとおり、私、彼氏もいませんし男性経験もゼロですからね。玲香さんのお役に立てるようなアドバイスは何一つできませんわよ」

「それでもいいんです、撫子さんに聞いてほしいんです」

「まあ、聞きますけど」

藁にもすがる思いで泣きつく私に、撫子さんはヒレカツにソースをかけながらニヤツと笑う。

私は食事をしながら、結婚して一緒に暮らし始めたというのに、旦那様が一向に手を出してくれないと打ち明けた。それを聞いた撫子さんも、わけがわからないといった様子で眉をひそめている。「うーん、よくわからないけれどいい方に解釈するのであれば、あなたを大事にしたいから敢えて手を出さないでいる……かしらねえ。七歳？ 八歳くらい年が離れてるんでしたわよね、確か」

撫子さんは話の合間に分厚いヒレカツを一切れ、パクツと口に入れる。

その瞬間、彼女の頬がふわっと緩んだ。

美味しいものをものすごく幸せそうに食べる彼女との食事はいつも楽しい。こっちまでつられて顔が緩んでしまうから。

「はい、そうです……撫子さんの言うとおりならいいんですけど……いえっ、よくない！」

私が急に大きな声を出したので、撫子さんがビクツと肩を震わせる。

「びっくりした。何がよくないの？」

ヒレカツを持ったまま、撫子さんが私に問う。

「私……知廣さんと一緒に過ごすうちに、どんどん彼が好きになってしまっ。は、はしたないんですけど……か、彼に触れてほしくてたまらないんですっ！」

「まあ……」

さすがに撫子さんも、私の思い切った告白にちよつと引いていた。

「でも、彼は全然私を欲しがらないし……なんだか不安になってしまっ。もしかしたら私、彼に

好かれていないのかなっ、とどんどん悪い方に考えてしまっ。それに何より……」

ヒレカツを持ったまま固まっている彼女を前に、私は思わず自分の顔を両手で覆った。

「このままじゃ私、自分で自分が抑え切れなくなりそうで怖いんです……!! まさか、自分の中にこんな欲望が潜んでいたなんて、びっくりなんですけど」

「……つまり、欲求不満で爆発寸前ということなのね？」

ズバリと口にした彼女に、顔から手を離れた私はつい恨めしげな視線を送る。

「撫子さん……せつかくオブラートに包んだのに」

静かに納得してヒレカツを口にする撫子さん。私はがっくりと肩を落としながら、ロースカツを口に運んだ。

「だったらいつそのこと、玲香さんから押し倒してみては？」

撫子さんからの大胆な提案に、私は慌てて首を横に振る。

「ええ、無理ですよ、そんな……！」

「大昔じゃあるまいし、今どき女から誘うのなんて全然アリですわよ」

「そ、そう、かしら……ねえ、撫子さん……私って女性としての魅力が少なかつたりします？ だから、知廣さんも手を出してくれないのかしら……撫子さん、どうしたらいいと思います？」

すると、撫子さんが割り箸を置いて私を見つめてきた。

「玲香さんは普通に可愛らしいと思いますけど。小柄で細身で、目も大きくてくりっとしてますし」

「ありがとうございます……ってそうじゃなくて、私から色気を感じるかどうかなんですけど……。男性が手を出したくなるような色香を醸し出すにはどうしたらいいかというご相談で……」

すると撫子さんは呆れたように小さくため息をついた。

「それこそ、女の私にはわかりかねますわ。もういつそのこと知廣さんに直接聞いてみるのがよろしいのではなくて？」

「それができればこんなに悩んだりしません……」

「ですわね。お役に立てなくて申し訳ないわ」

少なくとも好意は抱いてくれていると思う。だけど、私みたいに欲望を感じるほどではないというところ？ それとも、私のことを大切に思ってくれているから、手を出さないでいるのか……いやでも……

ぐるぐる考えても、私には答えがわからなかった。

「やっぱり、知廣さんが何を考えているのかわかりません……」

結局私は考えることを放棄して、ガクンと項垂れた。

大人の男性の気持ちなど、恋愛初心者の私には到底理解できるはずもない。考えれば考えるほど迷宮に迷い込んでいく心境だ。

「あらあら……困りましたわね。そうだわ、あなたのお兄様に聞いてみるのはいかがです？ 男性の気持ちは男性に聞くのが一番いいと思うのですが」

もぐもぐと順調に大盛りヒレカツ定食を平らげていく撫子さんの提案に、私はギョツとする。

「そんなの恥ずかしくって無理です!! それにこんなことを家族に相談したら、夫婦仲が上手くいったのかって心配されてしまいます」

「確かにそうですね」

撫子さんが頷く。

「あ！ 撫子さんの従兄弟に、経済界のプリンスと呼ばれている、たいそう女性にモテてる方がいらつしやるじゃないですか。その方にそれとなく聞いていただくことは……」

すると、今度は撫子さんがギョツとした顔をして食べる手を止めた。

「征一郎のこと!? あいつは無理ですわよ! こんなこと尋ねようものなら目をつり上げて威嚇されるのがオチですわ」

ありえない、とばかりに彼女は首を横に振る。

彼女の従兄弟である神野征一郎氏は、メディアにもよく出ている有名人だ。イケメンでスタイル抜群の彼は、イケてる御曹司として少し前までマスクミを賑わせていた。

「すみません、失礼いたしました。それに、確か征一郎氏は最近ご結婚されたんですよね」

「そうよ。私達とたいして年の変わらない女性と結婚して、すっかり落ち着いたようよ。ああ、そういうえば征一郎も三十歳ね。知廣さんと同じくらいかしら」

「はい、そうです」

私がかくんと頷くのを見て、彼女は箸を置いた。大盛りのヒレカツ定食はいつの間にか綺麗に無くなっており、撫子さんは手を挙げて店のスタッフを呼んだ。